体育・スポーツ科学の分化・総合論の批判的検討：
13人の思索（1972年）が示すもの

片岡 暁 夫¹⁾

**A critical examination of differentiation/synthesis
theories on sciences of physical education and sport:
suggestions from 13 authors (1972)**

Akio Kataoka¹

Abstract

An attempt was made to critically review the characteristics of theories on differentiation and synthesis of the sciences of sport and physical education using a framework of analysis based upon scientific philosophy. The basic problems to be solved are: 1. Where can we find the knowledge that we need? What fields of science are there? What directions are they taking? What characteristics do they show as a whole, why? 2. How is the relationship between the sciences of physical education and sport developing? What relationships exist among general abstract notions such as “body”, “movement”, “physical education”, “sport”, and “physical fitness”? Where is the denotation of our field and what is its connotation? These two problems need to be answered before creating a framework. The framework for this review is based on 13 interrelated special research branches categorized by the Japanese Society of Physical Education and 21 registered societies having research connections to physical education and sport sciences of the Science Council of Japan. There are 4 standpoints for review: (1) technological cognitive systems, (2) value frameworks, (3) practical human bodily phenomena, (4) subjective standpoint of the practitioner. The technological cognitive systems are divided into 4 sub-systems, which are groups of technological knowledge gained from: 1) sciences focusing on the mammals and mankind, 2) philosophical-anthropological sciences, 3) sciences of the natural environment, and 4) sciences of the social environment. The value frameworks along with its social needs make up each society. Human practical bodily phenomena are the sources for data which are produced by cognitive and evaluative frameworks, and the subjective standpoint of practitioners is that of evaluation of this knowledge is done in accordance with their requirements. The materials of this study are theories by 13 authors published in a monograph in 1972, because these still influence the general direction of scientific complexing in Japan. The thoughts of these 13 authors were reviewed, and several tendencies were evident among them. After review, 3 more problems needed to be answered: 1) what is the influence of the contemporary era on research? The 13 authors had no interest in environmental-technological problems on earth when theorizing about “differentiation and synthesis”. They were interested mainly in physical education science as the core science for integration. 2) What scientific paradigm do we need as a substitute for “analysis and synthesis”? The answer is expansion of the notion of science such as teleological explanations through system theory and meta-system theory. 3) How do we understand the paradigm of “theory and practice”? Many of the 13 authors found the synthesizing moment of sciences in practice. The present author, however, shows that the synthesizing moment lies in the framework itself and not in practice. They authors presupposed a

---

1) 筑波大学体育科学系
〒305 つくば市天王台 1-1-1

1. *University of Tsukuba, Faculty of Health and Sport Sciences, Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305)*

paradigm of “theory and practice”, “body and mind”, and “natural science and spiritual science”, and were latent followers of the binominal frame of reference. The present author suggests that there are 5 factors of the synthesizing moment: theory, technology, evaluation, practice, and the human being from the standpoint of philosophical pluralism.

Key words: theory, practice, technology, value

(Japan J. Phys. Educ. 42: 113–127, September, 1997)

キーワード：理論，実践，技術，価値

研究の動機および目的

日本体育学会が発足して50年に近付いている。会員も7000人に達しようとしている。この学会は、どの学会とも同じように、会員の一人一人が異なる研究課題をもち、異なる研究発表を続けている。複合的な研究領域からなる体育学会では、同じ体育学会の会員相互の間にも理解不可能性と相互無関心性が生じているであろう。このような相互理解不可能性および相互無関心性の存在はスポーツ種目相互の間にも成立する。

体育やスポーツの専門家は必ずしも学者ではないし、学者である必要もない。彼らは技術的实践を中心とする者である。しかし彼らの技術的实践は、学的な裏付けが必要とされる。実践者が学的知見を取り入れなければならないようになるのは、技術的实践に影響がある場合であり、それを知らないことが責任問題となるような状況であろう。つまり、社会的に専門家責任が問われる状況である。少なくとも知っておくべき技術的知識というものがあるのである。

このような事を自覚することにより、体育諸学あるいはスポーツ諸学の総合という問題意識が生じる。我々は、はたして、共通の関心と知見と社会的責任をもつのか。なにが共通であるのか。このような問いに答える努力がなされて来ている。

研究方法が様々であり、研究対象もまた様々である。これを総合するために用いる概念は、抽象的にならざるをえないように思われる。例えば、研究対象について、身体、運動、体育、スポーツ、体力などが抽象的な概念として、総合の道具となっている。また、「理論と実践」というカテゴリーが総合論の道具になっている。さらに、各

学問領域において「学の体系化」という道具で、小さな総合をめざす立場もある。そして、なによりも、学の「分化と総合」というカテゴリー自体の認識論的な正当性が問われなければならないのである。科学技術が引き起こした地球環境の諸問題を解決することが要請され、科学パラダイムの転換や環境倫理学など、問題解決への様々な提案がなされている今日、「分化と総合」のカテゴリーの中に止まっている限り、問題の解決は見えてこないのではないかという疑問がある。

以上のことを整理すると、次のような研究問題になる。

1. 我々の必要とする知見はどこから得られるのか。どのような学問領域が存在するか。それらはどのような方向へ展開していくのか。そして全体としてどのような様相を呈するのか。それはなぜか。
2. 体育学とスポーツ科学の関係はどうなるのか。
身体、運動、体育、スポーツ、体力などの基礎的抽象概念の関係はどうか。われわれが対象とする外延はなにか。内包はなにか。
3. 時代は研究とどう関わるか。
4. 分化と総合のパラダイムに代わる学問のパラダイムはなにか。
5. 「理論と実践」というパラダイムについてどう捉えるか。

総説の手順および限界

総説の手順として、まず1および2の問題に答えて基準となる枠組みを設定し、それに基づいて先行研究の批判的概観を行い、その結果を踏まえて、3, 4, 5の問題に答えよう。なお、紙数の制限があるので、この総説においては、日本にお

ける学会の現状に基づくこと、および、1972年発行の体育原理研究会編「体育学の分化と総合」に論文を執筆した13人の日本の体育学研究者による分化・総合論を対象とすることを研究の限界として設定する。

本 論

1. 我々の必要とする知見はどこから得られるのか、どのような学問領域が存在するか、全体としてどのような様相を呈するのか、それらはどのような方向へ展開していくのか、そしてそれはなぜか。

(1) 我々の必要とする知見はどこから得られるのか。

学の発展に伴い、我々日本体育学会会員の関与する研究も分化し、多くの研究領域を抱えるようになっていく。体育学会は各専門分科会に分かれ、さらにそれぞれの内部でも、そのコード表に見るごとく、細分化されている。体育学会の専門分科会は13分野である。我々の必要とする知見は体育学会全体の産出する知見とどう関係するのだろうか。はたして我々はどのような共通の必要性をもっているのだろうか。実践者の立場からすれば、そこに何時か必要となるかもしれない知見が含まれていると考えることができる。従って、どこにどのような知見が収蔵されているかを体系的に整理しておくことこそが共通の必要性である。それは外側のラベルを見ることで理解できなければならない。

(2) どのような学問領域が存在するのか、全体としてどのような様相を呈するのか。

① どのような学問領域が存在するのか。

専門分科会の名称は、一見して名称上の統一性に欠ける。体育学とはいったいなかを専門分科会名称から直ぐに理解することは難しい。

専門分科会の名称について語用論的に検討してみよう。まず第一に、体育（ ）学であるのか、運動（ ）学であるのか、スポーツ（ ）学なのかという限定詞不統一の問題がある。たとえば、体育（社会）学、運動（生理）学、スポーツ（人類）学という三種類の用法がある。三種類は「（ ）

学」部分を限定している。これら体育・運動・スポーツの概念を区別するのを後まわしにして、ここでは便宜上、「体育・運動・スポーツ」に限定詞的用語をまとめておこう。第二に、バイオメカニクス、発育発達、測定評価、保健の分科会は限定詞および「学」を欠いている。補うとすれば、体育・運動・スポーツ（ ）「学」になる。即ち、体育・運動・スポーツ（バイオメカニクス）学、体育・運動・スポーツ（発育発達）学、体育・運動・スポーツ（測定評価）学、さらには体育・運動・スポーツ（保健）学と理解してよいのだろうか。それぞれの専門分科会に歴史があり、現在のような名称に落ち着いたのには理由があるだろう。しかしながら、専門分科会の名称を通して、体育学全体としての統一性を理解しにくいところがあるのは、否めないであろう。それゆえに用語を補ってみることにある種の意義があると考えるのである。

さて、学の限定詞として「体育・運動・スポーツ」による諸学の知見の集合が体育学の内実であると考えてよいのであろうか。そうだと仮定してみよう。そうすると次に、13の専門分野で全てなのかという問題がでてくる。たとえば、老化学の分野からスポーツ活動による活性酸素発生の問題が提起されたり、外国にはあって日本にはないスポーツ経済学のような分野、あるいは日本学術会議の体育学・スポーツ科学研究連絡会に登録されている体育学会以外の諸学会が提供する学的知見はどう扱うのかという問題である。従って、限定詞としての「体育・運動・スポーツ」を受ける学問的分野は開かれており、どの学問分野からどんな知見がもたらされるか判らないということになる。言い換えれば、これらの限定詞をもちいるかぎり学問分野の限定はできず、従って、体育学は学的に独立して存在しないということになるであろう。

この問題を解決する方途の一つとして、対照的に限定詞と被限定詞を逆転することがあるのではないだろうか。即ち、（ ）「学」的「体育・運動・スポーツ学」と逆転して考えてみる必要がある。そして、さしあたり「体育・運動・スポーツ

学」をまとめて、広義の「体育学」としてみよう。そして限定詞化するためにその「学」を削除すると例えば、原理的「体育学」、歴史的「体育学」、生理的「体育学」、バイオメカニクスの「体育学」、人類的「体育学」である。この変換操作により、名称上の「体育学」が成立し、形式上体育学会の統一が実現する。このことは一見ことばの遊びのように見えるかもしれない。しかし「体育学」が何らかの技術認識に関わるものである限り、このようにする原理的必然性が存在するといえる⁵⁾。

「体育学」が技術学的知見の集合であるとする、限定詞は知見の部分集合を示すことになる。「体育」に関する原理的知見、歴史的知見等々であり、それぞれは、たんに「体育」に関する知見の分類にすぎなくなる。全体は「体育」に関する知見の集合であり、残された問題はその体系化にあるということになる。

② 全体としてどのような様相を呈するのか。

知識体系とはなにか。専門分科会を整理してみよう。全体を研究の対象と場の特性で区分できる。まず、ヒトと人間の区分は、対象を切り取る研究態度における根本的相違である。従って「体育」に関係する研究対象としての人間をヒトの科学という視点から理解し技術へ結びつけてゆく領域がある。「生理的知見・バイオメカニクスの知見・発育発達の知見・測定評価的知見・保健的知見」などがこれに属すると大まかにいえよう。第二に人間を人間科学の視点から理解し、技術へと結びつけてゆく領域がある。「原理的知見・歴史的知見・社会的知見・心理的知見・経営管理的知見・方法的知見・教科教育的知見・人類的知見」がこれに属する。しかし人間は一人で存在するわけではない。特性をもつ場の中に存在している。つまり、環境や社会や文化に囲まれて生きている。このことを中心的に考慮に入れ技術へと結びつけてゆく知見の領域が成り立つ。そして、環境は、さしあたり、自然環境と社会環境に区分できる。従って、全体としては、1.ヒト学的知見の体系、2.人間学的知見の体系、3.自然環境学的知見の体系、4.社会環境学的知見の体系という四種類に体育学の知見を区分できることになる。専門分

科会をこれに従って分ければ、おおよそのところ、次のようになろう。

第1 技術体系

哺乳類・ヒト学的技術知見の体系（生理的知見・発育発達の知見・測定評価的知見）

第2 技術体系

人間学的技術知見の体系（原理的知見・心理的知見・方法的知見・教科教育的知見）

第3 技術体系

自然環境学的技術知見の体系（バイオメカニクスの知見・保健的知見・人類的知見）

第4 技術体系

社会環境学的技術知見の体系（歴史的知見・社会的知見・経営管理的知見）

「体育学」が具体的な人間を対象とする認識に基づいて成立するものと考えれば、まず、生物としての人類を認識する必要があるし、個人を生物的存在として把握する必要があるだろう。しかし第1 技術体系だけでは人間の理解に立つ体育指導は成立しない。従って、個人の思想、性格、技能特性、人格の成長といった側面からの認識を要請される第2 技術体系が必要であろう。さらに第3 技術体系、たとえば重力的な自然環境、細菌や環境汚染といった保健的自然環境、そして風土論的な自然環境の中にいる人間といった側面からの認識を加えることにより、障害や疾病の予防が図られまた、自然と人間の共存という現代の課題に応える技術視点が導入されるであろう。そして、第4 体系の社会環境学的な知見により、人間としての未来への可能性を保障できる技術を手に入れるようになるであろう。括弧内の知見領域には上記以外の学問も入ることができる。例えば、第3 技術体系に野外教育学や生態学の知見が加えられうるし、第4 技術体系に経済学の知見が加えられるであろう。括弧内は開かれている。

具体的な「体育」の場面で、各下位の体系からどのような技術知見を選択するかは、状況によるわけであるが、少なくとも、四つの視点はつねに平行して確保されなければならないであろう。そのようにして始めて人類の福祉へつながる「体育

学」が成立するといえるのではないだろうか。あるいは、我々の必要な技術知見がどこに収蔵され、どこで生産されているかを把握できるようになるであろう。

従来の「体育学」の体系論、あるいは、欧米におけるスポーツ科学論に比較すると、個別学問領域を可変的なものとして捉えたところ、そして総体として技術学として捉えたところに、人間の把握能力に適した簡潔な構造を得られる可能性があるのではないかと考える。

(3) それらはどのような方向へ展開していくのか。そしてそれはなぜか。

平成9年現在、日本学術会議体育学・スポーツ科学研究連絡会に登録される学術団体はすでに21を数える。日本体育学会以外20団体存在するということである。それぞれが体系化と技術知見生産の必要性を示していると見られる。今後増加していくと考えられる。

これを前述の4技術体系と比較してみよう。ほぼ重なるものは、4技術体系のどこかに入れられる。それ以外のものは、4体系すべてを含むが、研究対象が制限されたものであるということがわかる。

4技術体系のどこかに入れられるものとして、日本体育・スポーツ哲学会、スポーツ史学会、日本スポーツ心理学会、日本体育・スポーツ経営学会、日本スポーツ教育学会、日本体育科教育学会、日本スポーツ方法学会、日本スポーツ運動学会、日本運動生理学会、日本バイオメカニクス学会、日本学校保健学会、日本教育医学会が上げられる。

これに対して、日本ランニング学会、日本スプリント学会、日本ゴルフ学会、日本テニス学会、日本スキー学会、日本女子体育連盟、日本武道学会、日本レジャー・レクリエーション学会、はそれぞれ4技術体系に関わりをもつが、対象を制限したものである。そう考えると、知見の制限という縦軸が整理される。これらは大きく三つに分けられよう。即ち、運動種目制限（日本ランニング学会、日本スプリント学会、ゴルフ学会、テニス学会、スキー学会、武道学会）と対象者制限（女

表1 体育学的知見の体系

子体育連盟）および活動目的制限（レジャー・レクリエーション学会）である。運動種目別の技術知見の整理と生産、対象者別の技術知見の整理と生産、そして活動目的別の技術知見の整理と生産が今後必要性を高められると思われる。そして日本体育学会は、全体を包括する位置にあるといえよう。従って諸学の構造化は日本体育学会において最も解決すべき技術知見整理の課題である。そのようにして、必要な技術知見が必要なときに引き出せるということになる。

以上を整理すると、表1が得られる。

2. 体育学とスポーツ科学の関係はどうなるのか。

われわれが対象とする外延はなにか。内包はなにか。

(1) 体育学とスポーツ科学の関係

前項で、日本体育学会を中心とする専門分科会・諸学会の状況を整理した。そこでは体育・スポーツ・運動を含む広義の「体育学」を使用した。これをもとに戻して第1表に対比させてみよう。

狭義の体育学の知見は主として第2技術体系に属するものである。しかし、その限りで、他の3技術体系と関連を有する。人間学的知見がヒト学的知見と無関係ではないし、また、環境とくに歴史的推移や社会的状況とも無縁ではありえないからである。また制限因子との関連で捉えれば、例えば、「児童の（対象者）主体性をそだてる（活動目的）バスケットボール（種目）の授業」というように、個別の研究課題は多重の制限で知見を動員することになるであろう。つまり、狭義の体

育学の知見は、指導要領種目で児童・生徒を対象者として教育的活動目的に関わるものである。

これに対して、スポーツの知見を狭義にとらえれば、種目の集合名称であると考えられるので、主として、種目別技術知見に属するものである。従って、技術学的体系の4体系すべてに関係するものであり、また、対象者も多様であり、活動目的も多様でありうる。このような意味で、体育の知見と同様に、すべての知見区分と関係する。

身体運動に関する技術知見は、自然科学的な概念として捉えられる場合（ex. 運動生理学）と、人間学的な概念として捉えられる場合（ex. スポーツ運動学）がある。しかし、自然環境や社会環境との関連は薄い。制限因子との関係はすべてにわたる。

このように見てくると、上記のそれぞれの概念は、かなり包括的に技術知見をまとめるものではあるが、どれも十分とはいえないであろう。

そうすると身体概念が登場しなければならないであろう。身体に関する技術知見は、技術学的体系のすべてと深く関係するようになっている。ヒトに関する知見はもちろんであるが、人間学的知見においても近代の心身二元論を克服しようとする哲学的身体論の発展などに見られるごとく、身体技術に対して重要な位置が与えられている。また、自然環境的な知見との関連も、地球規模の環境汚染や生態学的危機との関連で、身体を疎かにできない状況にある。つまり、環境と結びついて切り離すことのできない技術的身体認識が要請されている。さらに、社会環境との関連でいえば、身体の文化性が発見され、社会科学の領域においても、身体的技術をどう認識するかという問題が重要になってきている。また、制限因子でみると、種目別に身体の発達や適性がことなり、対象者の主体との関わりで、身体を抜きにすることはできない。さらに、活動目的との関係では、目的達成の基礎条件として立ちのどかる身体として出現する。レクリエーション・リハビリテーション・セラピー・教育目的の達成などに関係する。

このような意味で、広義の「体育学」の知見は、身体技術学の知見として総合できる可能性がある

といえよう。ただしそれは医学のとらえる身体と区別する必要がある。上記の4体系は医学にも共通する知見を含み得るものである。つまり、「体育学」を境界づけることはまだできていないということである。両者の境界領域あたりに、例えば、体力医学が位置づくだろう。この境界を設定するのは、何か。これに答えるために、上記の制限因子に再び注目しなければならない。なぜ研究者が学会を組織するのか。それは、設立の主旨など、組織目的を持つからである。従って、制限因子は、実は、価値選択を行なっているということになる。例えば、各スポーツ種目ごとに学会が形成されるとすれば、それぞれの会員は自己の価値認識や好みによって個別の学会に分属することになるだろう。このように、医学と「体育学」は価値認識において異なる傾向となるのである。この価値認識に基づいて、知見の4体系が取捨選択され組織化し、個別学会のコード表ができあがってくるのだといえよう。

さらに四つの技術的知見の体系と価値選択枠組みを縦横軸として、認識されるものとしての実践が位置づく。実践は個別の価値を負荷しながら、認識枠組みを超える具体的な身体関連の諸現象として存在する。言い換えれば、認識の枠組みを立てることにより、データが汲み取られる源泉として存在しているのであり、切り取る視点が設定されないかぎり、研究者の意識に上ってこないものとして存在するのである。さらに言えば、認識枠組みは実践に比較すれば不連続で断片的で、多くの穴が開いているといってもよいであろう。しかしそれらはメタ実践のレベルにあるという性質をもつ。新しい創造的な枠組みから、思いもかけなかった学問領域が生じてくるであろう。かくして、第1図が得られる。この構造を基準として、従来の分化と総合論を分析し、総説論文としての寄与を行なおう。

(2) 体育学・スポーツ科学の分化と総合に関する先行思想の検討

実践者の「人間の内的統合」において諸科学の総合が成立するという見解がある。このような主張をする者に石津誠⁴⁾がいる（石津⁴⁾, p. 11）。

図1 実践と技術学的・価値的認識枠組みの構造

科学が分化し人間から離れていくとしても、それを行為する人間において統合した生活が宗教的な深さにおいて実現するということがありうる。体育を行為としてとらえれば、敬虔な体育者というものが、十分に存在しうるものであり、存在してきたともいえる。行為論と知識論は異なる問題であるということをおさえておかなければならない。彼は、科学者ではなく体育者であり、体育者としての立場がこのような思想に導いたと理解される。体育は現実的な行為レベルの問題であるゆえに、価値観と関連し、価値について議論をすることが重要なのである。体育の価値について議論をすることが価値的な体育の総合をもたらすことになる。彼は分裂した知と値を総合するには「…分化的性能を有し細分化を任務とする科学の立場から究明された運動を、理性的な立場から人間的行為として総合的に理解することが必要である。」（石津⁴⁾, p. 24）と述べて行為場面における理性主義の立場を明瞭にしている。言い換えれば、人間の知恵によって科学的知識を行為場面に生かしていこうという立場であり、体育者からの発言であるが、図1の構造に照らすと、基本的には整合するが、説明力が不足している。

「内なる総合」の立場に近接するのが「教育による総合」の立場である。浅井³⁾は「教育」によって総合されるべき二項対立として「体育理論と体育学」、「実践と経験」、「内的経験と外的経験」の3種を導入する（浅井³⁾, pp. 26-36）。さらに、独自の原理をもつものとしての体育学について彼は「教育 Die Paedagogik は目標を『精神的なもの』に求めるが、体育はこれを『身体的なもの』

の』の教育から到達しようとする。ここに体育独自の教育の場面がある」（浅井³⁾, p. 34）と理解する。そしてさらに「…体育学が独自の原理にしたがうとなると、応用の学として存在することを否定してくる。ここにスポーツの科学と体育の科学との関係が一つの問題になる」（浅井³⁾, p. 31）と展開する。そして「スポーツが人間をつくるのに対して、人間もスポーツをつくる。前者は体育学の中心問題であり、後者はスポーツ学の主要問題である。」（浅井³⁾, p. 32）つまり、スポーツがどのようにして人間をつくるのかという問題が体育学が説明すべき中心問題であり、あくまでも人間形成の説明に中心がおかれる。これに対して人間がどのようにスポーツをつくっていくかを説明することがスポーツ科学の主要問題であるとする。「体育学が独立科学を希望するならば、問題の解明にあたって、自然科学的側面と精神科学的側面との間に存在する深い溝に、一つの橋をかけ、関係しない2つの領域に結合帯を与えていかなければならない。それでは、この橋の結合帯となるものはなんだろうか。それは「人間」そのものではなく、人間の「教育」のそれである」と総合の方針を明らかにする（浅井³⁾, pp. 33-34）。「教育」という行為概念をもちだしたところに、石津と同様な体育者の立場が現われている。第1図と対照すると、価値認識の枠組みが体育価値を中心としていること、そして、学的体系について、現実の体育学会の研究様相を2項対立に解消し、現実を視野に入れていないところに不十分なところがある。

これまでの二つの立場が体育者の立場からの総合の模索で、知識と行為の明確な議論なしの総合に傾いていた。これに対して学問論の展開というレベルに議論を絞る立場がある。即ち岸野⁸⁾（岸野⁸⁾, pp. 37-48）である。彼はまず、体育学が応用学であるということの意味を問う。体育学は、応用学が集まったものだ（岸野⁸⁾, p. 42）という。この集合せしめる力はないか。「それを教育でいえば、教育科学という総合科学を体系化する固有の論理をいうのである。この固有の論理を確定する教育学（狭義）なしには、教育科学（広

義の教育学)も解体してしまう。体育の研究の場合でも同様である。そこで問題は発展し、たとえば体育の場合、その固有の論理はなんであるのかという問題、つまり体育学の原理論の究明になるのである。」(岸野⁸⁾, pp. 42-43) 彼は「…狭義に解した体育学とは、この体育科学という多くの研究分野を総合するかなめであり、中核である。つまり、それは総合科学としての体育科学(広義の体育学)の研究を方向づけ、関連づける固有の論理である。…ここでいう体育とは、教育概念を越えた身体=運動的現象である」(岸野⁸⁾, p. 47)と述べて、その超越性を主張している。また彼は、文化的体育学とスポーツ的自然学の分裂ということを描している。原理論と自然科学の対比が暗黙のうちに語られている。先に述べた原理論は体育学の原理論であって、スポーツ学の原理論ではないのである。この両者を統合する原理論として彼があげるのは「身体文化」の理論である。即ち『身体文化』は、それぞれのニュアンスをもちながらも、教育を包含した大概念と考えられるようになった。…従って、身体的な文化現象を対象とする身体文化学も、身体教育学を越えた広い専門科学であると解せられている」(岸野⁸⁾, p. 45)という。しかし、「文化」の概念が不明瞭であり、さらには「文化学」とはなにかという問題をも惹起する。原理論と自然科学の対比に立てば、自然科学批判をどうしても必要とすることになる。その点について、彼は思想的に次のように言及し総合の契機として生の哲学が果たした役割を述べている(岸野⁸⁾, p. 46)。つまり、総合契機として生の哲学や解釈学を位置づけているのである。彼のいう原理論はこの系譜の上に発展すべきものと見てよいであろう。つまり自然科学批判なしの総合理論はありえないということになるのである。かくして彼は次のように結論する「体育科学の研究は、いうまでもなく人間の身体=運動現象を対象とする。それをめぐって直接問題となるのは、健康、体力、技能の解明であり、それらをとおして究極的には人間の解明にいたる。したがって、当然のことながら、その研究は多様に分化発展する。けれども、この体育科学

は、体育学の研究によって固有の論理が解明され、体育科学の研究の共通基盤が確認されなければならない。そのうえで、各科学部門に応じた基礎研究が着手され、さらにそれは応用分野に発展し、具体化するのである。体育研究における分化と総合を形式的に説明すれば、以上のような結論になるであろう」(岸野⁸⁾, p. 48)と述べて狭義の体育学による原理論の展開が、総合にとって不可欠であると主張するのであり、それは自然科学批判の思想史的な系譜の上に展開されることになると解されよう。卓見であるが、しかしながら、第1図と対照すると、価値認識の枠組みについての検討が残されているのであり、それが「健康、体力、技能」と価値の枠組みを現実的に限定してしまったところに現われているといえよう。また学的知見についても、二項対立の構想が潜んでいるように思われる。

岸野⁸⁾において観られたごとく、哲学・思想が体育学の原理論を構成すべき責任領域であるといっていよいであろう。現象学を体育哲学の中心理論として位置づけるのが阿部である(阿部¹⁾, pp. 49-60)。阿部は「体育哲学は、科学が対象の一部分または一側面を問題とするのに対して、常に全体を問題にする。ここから、体育学研究の分化と総合の問題を追求するにあたって、体育哲学は、総合の面において大きな役割を果たすことになると考えられる。」(阿部¹⁾, p. 52)と述べ、さらに「…「事象そのものへ」を哲学の本質的よりどころとする現象学は、分化と総合の問題を含めて、体育の有力な哲学になり得ることは間違いない事実であると思う」(阿部¹⁾, p. 54)と見解を明らかにする。しかし彼は体育科学が「…実践の場において総合されなければならない…実践と無関係に進められる体育科学の研究は、真の意味で体育学の研究とはいえないであろう」(阿部¹⁾, p. 57)と述べ哲学的総合を行う上で、実践の現場において思索することが総合への必須の道であるという主張が伺えるのである。彼において、まず体育者でありかつ哲学者であるということが総合の契機なのである。石津の立場とも近い。第1図と対照すると、主旨は理解できるのである

が、第2体系の意義および実践の意義についての主張にとどまっているといえよう。

研究方法をもち、しかも実践の現場において思索するという阿部の立場からみると、教育の現場はすぐれて実践的であり、その制度としても総合への本質的な特徴を開示する場である。前川はこのことを教育学の立場から明らかにする（前川¹⁰⁾, pp. 61-84）。総合の中心論理として「目標—内容—方法の一貫性」を上げる（前川¹⁰⁾, p. 83）。この一貫性は指導者と被指導者の存在を前提にする（前川¹⁰⁾, p. 62）といい、さらに研究へと展開する。「体育についての教育学的研究においては、いくつかの欠くことのできない領域がある。それを大別すると、第一は体育を必要とすることについての研究であり、第二は学習能の研究であり、さらに第三は指導の内容、第四は方法の研究である」（前川¹⁰⁾, p. 63）。前川は、対象論的研究、目的論的研究、内容的研究、方法的研究と四つの研究領域をあげ、実践を組織する方法論的研究において総合の場所を見ているといえよう。つまり教育学的総合とは、実践方法学による総合を意味しているのである。これは狭義の教育的体育学のみならず、スポーツ実践をも包み込むように拡大できる枠組みを提示しているとみられるのである。国民体育の目標論研究において狭い意味での体育学の特徴が現われているといっていよう。従って、目標において分化が、方法において総合が出現する。目標を選択したら、それを達成する知識群を集め、方法として総合し、実践でフィードバックとフィードフォワードをしていくという構図になろう。知識のプールは、体育学・スポーツ学のみならず、学問のあらゆる領域から採用される可能性をもっているのである。いわば知識の開放系に体育学の特徴がみられる。第1図と対照すると価値認識の枠組みを教育的体育学に限定していることがわかる。彼のいう対象、目的、内容、方法を価値認識的に捉え直せば、人間の価値、人間形成の目的価値、文化的価値、そして方法的価値となる。これは、教育的体育学の内部のコードの枠組みとして評価できる。また、学的体系との関連で述べれば、第2体系

の中の体育科教育学についての言及に制限されている。従って「体育学」の全体を視野に入れたものではない。

菅原¹⁴⁾は、学問の歴史に言及し次のように言う。「体育学は、現代の社会学のように分化された状態から出発したのであって、すでに存在したものが分化したものではない。したがって今後の課題は、その総合にあると言ってよいであろう」（菅原¹⁴⁾, p. 97）と述べ、体育学の後発的特殊性を指摘している。このことは、体育学が、体育課題の解決に役立つ知識を学問の諸分野から、偶発的に採集してきた経緯を物語っている。いわく医学から、あるいは教育学から、あるいはその他もろもろの学問領域から課題解決に役立つと思われる知識が集まってきたのが体育学という知識の集合なのである。この意味では体系的な体育学というものはない。菅原¹⁴⁾の立場は、社会学から出発して体育学の総合を目指そうというものである（菅原¹⁴⁾, p. 110）。各体育学の下位分野の理論構成や体系化が全体としての体育学の総合に繋がると考えられており、その意味で、体育社会学とスポーツ社会学がまず区分され、理論構成の柱となっている。結果的にばらばらに集まってきた知識群を社会学関連だけでも体系的に整理しなければならないという課題意識がうかがわれる。第1図と対照すると、この理論も「体育学」の全体に対する説明を期待していない。岸野のいう原理論にはならないのである。価値認識の枠組みについても、限界がある論述であるといえよう。また、体育学が技術学であるという認識についても不明確であろう。

小野¹³⁾は、体力医学の立場から総合について次のように言う。「少なくとも、人間の生命現象のすべてが完全に理解されないかぎり、それが果たし得る責任さえ明確にすることができない体育学・保健学・医学などの研究の場においては、分化的手法と総合的手法が唇齒輔車の関係を保ってきたことは、今さら言挙するまでもない…」（小野¹³⁾, p. 112）という。これは医学が実践とつながる性質を表している。心理学や社会学とは異なる立場である。理論的に不明確であっても、実践

においては経験的に判断し、知識と技術を駆使して問題に対処しなければならないことを指して総合と言っていると理解してよいであろう。「完全な理解」と彼が言う場合、分析的手法によって得られた知識に言及しているのは明らかであり、また完全な理解に達するのが永遠に不可能であると言っているとも理解できるのである。つまり、総合という場合、学問分野の総合というよりも、科学の不完全を補うものを加えなければならないということを意味していると解されるのである。ここが学問のために学問を追究する場合と実践学の場合との区分点となる。実践において総合を見るという点で、石津⁴⁾らの見解に近い。

学問の総合を論じる場合、学問の王者としての物理学へと還元していくことにより、あらゆる科学について将来は統一が可能であるという立場がある。この立場を比較的明瞭に示しているのが、小林⁹⁾である（小林⁹⁾，pp. 132-146）。検討は三つに分けられる。第1は、体育の対象と体育学の対象との関係、第2は、体育学は基礎学が応用学かという問題、第3は体育における科学と技術と技能の関係、となっている。

第1の対象の問題について、彼は「体育においても、体育を構成している素材は、現象の諸断面そのもの（運動）があるのみで、現象そのものには教育的目的は含まれていないと見るべきである」（小林⁹⁾，p. 132）という立場を表明する。ここで意味や価値の領域は切り捨てられている。つまり「運動」を物理的な視点から観察すべきものとして、方法論的限定を行っているのである。このような体育学検討の前提を立てて、いよいよキネシオロジーの位置付けに論が進むのであるが、還元論的な立場が明瞭に現われる（小林⁹⁾，p. 133）。結局は物理学的法則によって説明することが期待されている。そして諸科学は、現在のところ存在が許されるのであるが、その理由は次の通りである。「しばらくの間は、統一的原理によってはまとめられる可能性がない領域は、異なる専門分野として区分することになる」（小林⁹⁾，p. 133）というのである。学問群は将来的にはひとつの学問原理に統一されるという信念が現われ

ているのであるが、これが正しいという保証を人類はまだ手にいれていない。そしてまた次のように述べる時、複合科学の存在は否定されざるを得ない。「もしも、まったく異質な原理が適用されるべき領域を一つの名称と呼ぶならば、それは単なる混合物であって、統一原理の出現を望むのは不可能であり、したがって、その名称のもとでの基礎学としての性格はもち得ない。」（小林⁹⁾，pp. 133-134）。この文脈からすれば、体育学は混合物であり、正統な学問名称は与えられるべきではないということになるだろう。ここで、先に述べた岸野⁸⁾の体育学はたくさんの応用学からなるという見解が思い出される。小林⁹⁾の見解は単一の応用学についてあてはまるとしても、体育学にはまだ一步を進める必要がある見解であるといえよう。

哲学事典¹⁶⁾（p. 184）によれば、応用心理学の各部門は「価値視点を中軸として独自の体系が形成されつつある」という。「応用」には実践・技術・価値がからんでいるのである。純粋学が価値から自由に理論を追求するのに対して、応用学は価値を選択し、そのまわりに知識を体系化するという技術学の様相を呈するのである。科学に当面するときは価値から解放されるのであるが、その科学に技術と技能がからんでくるとすれば、間接的には科学も価値から自由ではない、ということになるだろう。第1図と対照すれば、小林⁹⁾の見解は縦軸の学的体系についての議論に傾斜しており、価値認識の枠組みを必須とする「体育学」についての視野が限定されているといえよう。科学は専門家の集団であるとすれば、個人の研究態度が価値自由であっても集団としては価値自由でなくなるというのが科学史の証明するところである。このような意味で、小林⁹⁾の理論は古典的な科学論に立っていると思われる。このような矛盾が生じた原因は、すべての科学分野に必ず科学・技術・技能があるという前提を立てたからであろう。価値選択があり、ついで、価値自由へと展開するのが文脈であり、その意味では、基礎学と応用学という分類はあいまいなのである。むしろ、応用学あるいは技術から、基礎学が展開するとみてよい

であろう。

金原は、まず体育現象の区分から導入して実践による総合を目指す。即ち「体育学研究の分化と総合の方向を考察するには、まず研究対象となる体育現象をどのようなものとしてとらえておくかが問題になろう」（金原⁷⁾, p. 148）と述べ、体育現象を教育現象としての体育および生活現象としての体育に区分する。これを第1図と対照すると、認識枠組みと実践の関係が逆転している。つまり、体育現象を捉えるためには、すでに枠組みが必要なのであり、彼の枠組みによって制限されたものは、彼によって切り取られた体育現象になってしまうということである。そこに彼の議論の限界がある。この意味ではある者に気付かれざる体育現象も他の者には切り出された体育現象であるということが生じる。つまり見方次第で体育現象は変動する。しかし、この見方は、時代の見方として、ある程度の一致をみるであろうと予想されうる。体育の定義に変換すると、金原⁷⁾の場合、体育的視点から学校生活も含む人間の全生活について批評を行い、人々の活動の方向を指導し、実践にあたらしめるとき、この指導された実践を体育というということになるであろう。第1図と対照すると、彼の議論は、主として価値認識の枠組みと実践に関連する主張であることがわかる。そして、価値認識の視点を固定する努力がなされていることが理解できる。しかし、彼の視点であるかぎり、現実の体育学の研究動向を総合するものとはなっていないのではないと思われる。

彼の議論のもうひとつの特徴は、「実践の場に即した」実践知体系の構成、実践知の基礎科学的知識による裏付け、実践知による個人処方、実践知による集団処方、ということになり、医学モデルが潜在していることが推察される（金原⁷⁾, p. 152）。医学の場合、臓器別の専門医と方法別の専門医と対象別の専門医などがある。必要に応じて科を構成する。彼がいう「まとまりのある一つの分野」とは、比較的实践的専門性のある一つのまとまりという程度の意味であり、あくまでも実践上に意味のあるまとまりであると思われるので

あり、それは医学の場合と同じように、便宜的・実践的なものであるといつてよいであろう。彼のいうところの分化は実践的な価値のある分化である。彼のいう実践的分化にも一定の示唆的な価値がある。彼の場合、体育の成立は、客観的な傍観者、あるいは、神の立場から見る専門家による診断的体育学であったことを考えれば、医学モデルによる実践指導の立場からの実践による総合という意味が強いと考えられるのである。一定の先見性を評価できるのであるが、技術学的体系と実践的側面の区別が十分とは言えず、現実対応としては、不十分であるといわざるをえない。

川村⁶⁾は、人間を総合の中心に据える点で、小林⁹⁾の運動を中心に据える立場とも異なり、また、指導を中心にすえる金原⁷⁾の立場とも異なる。しかし、体育の研究は、実践を土台として総合されなければならないと述べる（川村⁶⁾, p. 164）。この点では、他の論者の多くと同一であるといつてよいであろう。川村⁶⁾の場合も体育理論と体育実践が表裏一体の関係にあるというのであるから、指導実践としての体育の概念が中心となるのである。しかし、実践には価値負荷が必ず伴い、偏向する。それをどう捉えるかが問題である。彼は、体育において最も核心となるものは、人間のより高い生活能力の獲得ということを重ねて行なう運動であり、それをもっとも正しくかつ有効ならしめるため、考えられるすべての面からこれを理解していこうとするのが、体育の研究であるというのである（川村⁶⁾, p. 177）。しかし、このように「正しい」動機が「体育学」の研究に保証されるとはいえない。これによって体育学研究の中心をとらえるのは、すでに、現代の体育学・スポーツ科学研究の意図を限定しすぎるものとなろう。彼の場合も、彼の価値によって体育学の総合を図ろうとしている点で、金原の場合と似ている。彼のいう生活能力の高さとはいったい何を意味しているのかがそもそも問題となってくるのが現代である。しかし、人間とは何かという問いを含み、理論と実践を価値において統一するという彼の議論は、評価できるものであるといえよう。

これまでの実践による総合の内容をふりかえると、実践の意味についてはかならずしも正面から論じていたとはいえない。むしろ実践という概念を提示するところまでであったといえよう。しかし、高部¹⁵⁾の理論は、実践の機能とはなにかという問いを含んでいる。まず彼は実践者の明確化をはかる。即ち彼は、小・中・高における体育担当教師の立場に焦点を合わせたいと思う（高部¹⁵⁾、p. 179）と述べる。この立場からさらに分析を進め、実践者の立場には、1. 研究結果を応用する立場、2. 研究結果を検証し批判する立場、3. 研究結果を総合的に受けとめる立場という三つの立場があるとする。実践者が総合受容者としての内容を有しているかどうかは問題である。このために彼はパースペクティブの必要ということを行う。「体育対象、教育対象が人間だから、人間を扱う体育や教育には、パースペクティブが要求される」（高部¹⁵⁾、p. 184）というのである。各構成科目をバラバラに記憶するのではなく、人間というパースペクティブによって総合し、その受容者となれるというのである。ここに個別領域の専門研究者とは異なる視点が存在することが明らかになる。第1図に位置づければ、身体的実践現象の只中にいる主体の視点であり、学的知見と価値認識の枠組みを内側から見ている存在者である。それを外部に立って研究的に見ている人間や国家政策などの価値認識に立って枠組みを制限しようとする人間と対立する立場にあるといえるであろう。この独自の立場が確立することにより、弁証法的な対立者として、研究者に相対し、研究の正当性を保証する機能をはたすということになる。そしてさらに、「仮に研究方法の科学的充足が考えられたとしても、その充足できる範囲には、おのずから限界があるのではないか、という問題」があり、従って「体育学研究のパースペクティブ」が研究者にも必要で「自分の研究的位置が、体育の実践という展望の中で、どの点を実践的に役立つこととして行なっているかの認識がされているのであれば、実践を背景とした全体一分節的な研究とは言い難いのである。…実践の場はパースペクティブなものであるのだから、それ

を裏付ける理論的研究そのものも、パースペクティブな認識のされ方によってなされなければならない」（高部¹⁵⁾、p. 186）というのである。このような意味では、体育学の研究者は実践の場と相互交流を常になんらかの形で所有している者であると条件づけられる。そしてその根源は体育科教育学を接点とした交流ということになる。「…運動やスポーツというように、身体活動だけの中から進められるのではなくて、教育への展望、そして、教育学をふまえての研究がなされなければならないのである。…そこで、もしそこに、体育学の領域を設定しようとすれば、それは体育科教育学とも称すべきものでなくてはならないだろう」（高部¹⁵⁾、p. 188）という。

以上の高部¹⁵⁾の理論は、体育教師の実践的総合という機能を明らかにした点で独自性のある総合論となっている。第1図と対照すると、技術学的知見の第2体系を中心としていることがわかる。また価値認識の枠組みでは体育価値を負荷された実践を中心に行っている。従って、現代の「体育学」の全体を総合する理論としては不十分である。しかし、彼の理論を発展させる可能性があるといえよう。

現代では学校体育指導のみを研究のパースペクティブとすることは体育学研究の現状を適切に説明することができないし、従って実践による総合を正しく行う基盤としては不十分である。永井¹¹⁾は、このような主旨の理論を発表している。彼は、実践の意味を、体育実践をする人の立場とか、体育の指導をする人の立場とかのように考えるという。そして、実践要求を体育学研究の存在理由としている（永井¹¹⁾、p. 193）。しかし、「運動実践と体育とは全く同じというわけではなく、運動実践は、体育にとっては必要条件ではあるが、十分条件ではない。…運動実践に対する期待は、歴史的・社会的な状況や科学的研究の水準によって変わってきている」（永井¹¹⁾、p. 196）というのである。この運動実践に対する期待が時代や社会で変化するという認識の中に体育的認識が込められているといえよう。十分条件となるための体育学的期待が必要と考えているのである。こ

れは対象論および目的論と関係する。そしてまた、大衆文化として多様な広がりを見せ、教育の範疇から逸脱する事例が多く出現してきているという現状を反映する議論と解釈できるであろう。「社会体育や生涯体育においては、一律的・直接的指導よりも、多様な運動要求に応じるために必要な諸条件を整える管理的活動の方が、より重要であるといえる」(永井¹¹⁾, p. 198) と述べるとき、学校体育を越えたところにも実践の場を見いだし、しかも、運動指導実践ではなく、運動管理実践を射程に入れていることが分かる。指導から管理運営への転換において現代体育の実践的特徴が見いだされるのである。体力や健康の管理、自分の身体の管理というような射程を考慮に入れるならば、実践概念の拡張が進行していることを認識していたということができよう。

実践が実践者において総合されるというとき、運動指導者ではなく運動主体である実践者を論じる立場がある。この側面から論を展開するのが浅田²⁾である。人間の身体運動を明らかにする分析視点として、サルトルの所説を中心に、身体運動を五つの範疇に分けて論じ、ここから導き出される要請を、人間の身体運動を明らかにするためには、身体運動が意義を受けるところ、つまり風景(外的世界)・内的自我・他人の視線の三側面から、それぞれのもつ現象学的意義を究明することが必要のように思われるという(浅田²⁾, p. 223)。人間にとっての運動の意味を問うのである。彼の立場に立てば体育学の分化は、結局、個人々人にとっての運動の意味の分析を通して、その場において総合されるということになろう。言い換えれば実践者の運動の現象学的把握にとっての外的世界および他人のまなざしとして、またその一部として体育諸学の知識は必要とされ、位置づけられるのであろう。いわば自立者の立場であり、指導を受けるとか知識を授かるという立場が否定される。むしろ自ら指導を求め、知識を探求するという積極的な立場に立とうとするのであり、科学依存を脱した実践者の立場を確立しようというのである。その意義を「身体運動象徴の知識は、…現実における人間理解を高めるという意

味で、音楽や絵画、その他非言語的芸術とともに人間教育に不可欠なものとして役立てられてきた。今後このような身体運動の現象学的研究は、現代人や体育そのものの究明とともに、体育実践の場でもその思索的基礎的知見を提供し、大きな寄与を果たすものと思われる」(浅田²⁾, 227頁) という。この実践者における思索は体育科学を逆に照射することにより、真の実践からの総合の契機となるというのが浅田の見解といってよいであろう。このような意味では、高部¹⁵⁾の理論や阿部¹⁾の理論と接続する可能性をもっている。第1図と対照すると、指導者ではない実践者の自己分析ということ、そして、学的知見では、第2知見体系に関係していると思われるが、「体育学」の全体を構造化して総合するものではない。

3. 時代は研究とどう関わるか

地球環境の諸問題が人類が早急に解決しなければならない問題であり、それなくしては人類は滅亡に至ると言われている。そうすれば体育もスポーツも存在しなくなる。上記の諸先行研究は、まだ、そのような問題意識を明瞭には意識していなかった時代に執筆されている。そしてこれらの危機の原因が科学技術の成果が引き起こしたものであるとすればその一部をなす「体育学」もまた、自らの問題として、それを引き受けなければならない。例えば、数十年前のオゾン層が健全であった時代の海水浴とそれが破壊され有害な紫外線の中での海水浴では、人々の価値判断が変化しているであろう。上記に検討したように、体育学を構成する横軸は、メタ的な価値認識の枠組みであった。そこに時代を反映する枠組みが設定されるはずである。そこにどのような価値の枠組みをもつ小学会が登場してくるかが、「体育学」の価値をきめると思われる。身体的な実践現象の場も時代で変質するのである。そのような意味で、我々が、四つの技術学的な知見の体系を必要とする実践価値を媒介とする分野に所属するということ、科学全体の中でも先端的でありうることを示している。

4. 分化と総合のパラダイムに代わる学問のパラダイムはなにか

分化と総合というパラダイムは、言い換えれば「分析と総合」という科学の前提をなす方法であるという。つまり、大きなまとまりを、小さくくだいてから説明することが、科学であるという。これに対して、小さなものを大きなもので説明するという学が必要であるという主張がある。言い換えれば学の問題を拡大する必要があるというのである。いわば目的論的な説明も学に取り込むのである。たとえば、目的を、「人類と自然の共生の実現」とするとき、体育はなにをすべきかを説明することである。説明できないものを捨て、説明できるものを残すということになるだろう。一般に、システムの思考というものであるが、それを論じるとすれば、メタ・システム論ということになるだろう。「体育学」のメタ的な価値認識で、科学的な技術知見を選択するという構造は、このようなシステム論的な展開への可能性をもっている。

5. 「理論と実践」というパラダイムについてどう捉えるか

理論と実践は概念上は、区別される。しかし、現実の行為においては両者の区別ができないといっただろう。理論を実践と区別することは、理論を神聖化することではないかという疑いがある。例えば、Schneider/Schnabel/Trogisch (1970) の *Die Trainingswissenschaften als Kernstück der Sportwissenschaft* (成田¹²⁾, p. 680) は、スポーツ科学の中核がトレーニング諸学であるというが、中心をなしているのは、明らかに *Marxistische-leninische Philosophie* である。マルクス・レーニン主義の哲学が不動の理論として位置づいていたのではないかと考えられる。なぜならば、理論には限界があり、それが取り替えられないとすれば、認識の硬直化が必然化するからである。そして、特に、価値理論における硬直化が学的知見を制限し、実践をも制限する。個別の実践は、価値負荷されているが、それ

が多様であるとき、離合集散をダイナミックに展開することになるであろう。そこに、実践の生命がある。同志を募り、特定の価値観点から個別学会を結成することが許容される自由が学問の自由である。従って価値理論の自由を保持し、さらに、それに対するメタ価値論が展開できることが重要になる。また、理論と実践は、技術と価値を媒介に入れ、人間を基盤に据えることによって2項対立から逃れることができる。即ち、技術、理論、価値、実践、人間という5元的構造が得られるのである。例えば、技術を欠けば、理論は証明されず、価値は空理化し、実践は迷路に迷う人々を生み出すであろう。理論を欠くと、技術は魔法化し、価値は迷妄となり、実践は蛮勇となるような人々が出てくるであろう。価値を欠けば、技術は暴走し、理論は冷酷化し、実践は社会的弊害となるような人々を生み出すであろう。実践を欠けば、技術に無関心で、理論は現実を遊離し、価値を実現しないような無気力の人々を形成するであろう。このような相互関係を視野に入れておく必要がある。理論と実践の2項のみであれば、技術を欠いて、理論は証明されず、価値は空理化し、実践は迷路に迷うのであり、また、価値を欠いて、技術は暴走し、理論は冷酷化し、実践は社会的弊害となる。要するに、証明のない冷酷な理論が横行し、価値が空理化して人々の自由を奪い、実践は迷路をはいずりまわり社会的弊害を生み、技術が暴走する社会が到来し、人間の存在基盤そのものが消失するような事態に至るのである。

文 献

- 1) 阿部 忍 (1972) 分化と総合の構造. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 49-60.
- 2) 浅田隆夫 (1972) 身体運動の現象学的論考 (序) —体育実践の一つの基礎理論として. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 212-227.
- 3) 浅井浅一 (1972) 体育学の序説的考察. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 26-36.

- 4) 石津 誠 (1972) 人間形成論における体育学の分化と総合. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 8-25.
- 5) 片岡暁夫 (1995) 「体育」における「研究」と「教育」の関係を考える. 体育の科学 45: 682-686.
- 6) 川村英男 (1972) 体育実践の構造. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 164-178.
- 7) 金原 勇 (1972) 体育学研究の分化・総合の方向. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 147-162.
- 8) 岸野雄三 (1972) 学問の分化と総合. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 37-48.
- 9) 小林一敏 (1972) キネシオロジーと体育学. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 132-146.
- 10) 前川峯雄 (1972) 教育学的研究とその問題. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 61-84.
- 11) 永井康宏 (1972) 実践的立場からの体育研究論. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 193-211.
- 12) 成田十次郎 (1995) 「体育」概念の明確化に向けて—ドイツの場合—. 体育の科学 45: 678-681.
- 13) 小野三嗣 (1972) 体力医学の場をふまえて. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 112-131.
- 14) 菅原 禮 (1972) スポーツ社会学と体育社会学—体育の総合をめぐる—. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 97-111.
- 15) 高部岩雄 (1972) 総合的立場としての実践者から体育学への期待. 体育原理研究会編 体育学の分化と総合. 不昧堂出版: 東京, pp. 179-192.
- 16) 哲学事典 (1978) 平凡社, 東京, p. 184.

(平成9年5月22日受付)
(平成9年5月30日受理)